

Hakuju Hall はソロリサイタルから小規模オーケストラまでを対象とする室内楽ホールとして計画されました。プロジェクト着手に際して、ホールのコンセプトに求められたものは、モダニズムに満ちた建築デザインと、音響に対する高いプライオリティです。現在、世界各国には斬新なデザインの大型のシンフォニーホールが数々建設されています。しかし、室内楽ホールについては、新しいデザインコンセプトを持つものは非常に僅かであり、一般に、高い音響性能が要求される室内楽ホールについては、欧米の優れたホールのデザインを踏襲する方法がとられる傾向があります。この場合、無難な結果が得られる確率は高くなりますが、Hakuju Hall の設計にあたっては、(今日、ご覧のような)世界的にも例の無いオリジナリティの高いデザインのホールに挑みました。

周知のように、ホールの音響設計は科学的側面と美的側面を持っています。従って、理論的根拠を伴わずに、直感的美学に基づいてモダンなデザインを行っても、良い結果が得られる可能性は限りなく低いでしょう。そこで Hakuju Hall では、この 10 年間で目覚しい進歩を遂げたシンフォニーホールの音響設計に関する方法論とともに、約 20 件の国内外の主要な室内楽ホールに関する独自の調査結果に立脚して設計を進めました。

そして、Hakuju Hall の建築デザインに反映されるべき、次のような音響的なコンセプトを設定しました。

- 室内楽の特長である繊細な音楽に寄与する透明感のある響き
- 300 人規模のホールに適合した残響感
- 空間的かつ親密感に満ちたホールトーンと音色のテクスチャー
- 演奏者にとって適度な音の返りのある、演奏しやすいステージ

例えば、音の透明感はヨーロッパのホールの古典的規範であるシューボックスホールの平面形をキープした上で、それに適合した天井高さを設定することによって得られています。残響感是一般に残響時間で表現されますが、Hakuju Hall では座り心地を考慮して吸音性能の高い椅子が利用されました。そこで、壁の剛性を高めることによって、椅子の音響特性とバランスさせています。この結果、残響時間は着席・空席ともほとんど同一な値となっています。つまり、リハーサルでも本番でもほぼ同一の残響が得られるので、より有意義なリハーサルあるいはレコーディングが行える長所も併せ持っています。ホールトーンとテクスチャーはホールの個性となる最も重要なファクターですが、ガラスのウィング、五線に対応させた側壁の溝のパターン、デフォルムされた船底天井によって達成されています。最後に、良い演奏をするために重要なステージの音響は、舞台後部の湾曲したガラスのオブジェや、僅かに客席方向へ拡がる舞台側壁などが寄与しています。

このように Hakuju Hall では、音響的なアイデアのほぼ 100%が建築デザインに取り込まれています。つまり、このホールのインテリアは全て音響的意味を持っているのです。

実際の設計にあたっては、コンピュータシミュレーション、縮尺模型実験、重要な音響材料の実物実験等、現時点でなしえる最高水準の物理的手段を用いて、高い精度の客観的な検討を行いました。また、内装工事の完了した 2003 年 3 月には、音響確認のための演奏会を実施し、ホールの響きを関係者の耳で実際に確認したうえで、最終的な音響チューニングの要否を検討して、今日の完成を迎えました。今後、Hakuju Hall は約半年のエイジング期間を経てオープニングを向かえますが、熱意ある建築主と優れた建築家とのコラボレーションによって、当プロジェクトでは本当に満足の行く設計プロセスが踏めたこと、かつ、当初の目標が十分に達成できたことを確信しています。